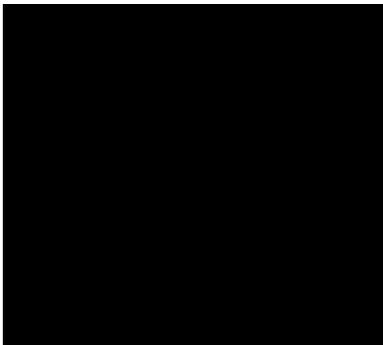


媛



ぼらで
いん

妹には散々怒られた。

馬鹿、兄貴は体が弱いのに、俺に任せてりゃいいんだよ、と。

これまで彼女から叱咤されることは何度もあった。そしてそれは、死や終わりに魅かれるわたしへの大きな励ましになっていた。

だが、今回妹が見せた反応は異なっていた。

眦を決して怒気を爆発させ、今からでもやめろ、俺がそんなに信用できないのかとなじられた。

確かにわたしが馬鹿だったのだ。

彼女がこんなにも気遣ってくれていたわたしが、あっさりと彼女と同じ未知との戦いに身を投じたのだから。

わたしは何も言い返せず、ただ激しい言葉に身をさらしていた。しばらくすると落

ち着いたのか、さっきまでわたしが座っていたところの向かいにある、少し離れたソファへ腰を下ろす。わたしたち兄妹が相手に対して怒ったのは、これが始めてだった。お互い次は何をすべきか分からず、気まずい沈黙が流れる。

ホールの柱に吊られた時計の分針だけが音を響かせていた。

『ごめんな。多分オレの気持ちも入ってるから、許してやってくれよ』

妹の近くから彼女に降りた船魂、天龍さんの声が響く。彼女の声とほとんど同じ。そういえば、龍田さんも妹の学校を訪ねていたときわたしが作っていた声と同じ感じだった。魂が繋がったことはこういうところにも影響しているんだらうか。

『船の頃はオレの方が先に逝っちゃったから、だから妹。いや、こいつの場合は兄貴

か。あんたのことが気になるんだよ』

『あら、天龍ちゃんそんなこと気にしてたの？ そんなの時の運じゃないの』

龍田さんは意外とあっさり否定した。そういうものだから。そんな諦観はわたしにちよつと似ている気がした。

とにかく、わたしたちの中にいる彼女たちが口火を切ってくれたおかげで、わたしも口を開く勇気ができた。

「話さなかったことは、ごめん」
だけど、それだけ。

本当にわたしは至らない。

妹はそんなわたしに呆れてか、ソファから腰を上げる。

そのままその場を離れるかと不安になってしまったが、彼女はホールの隅にあった自動販売機のボタンを押し、カップ入りの飲み物を取り出す。それをもう一回。

それらを両手に持ちこちらへ向かってくと、わたしにソファへ座るよう顎で促がし、片方をわたしに押し付ける。

湯気の立つココアだった。

「俺こそ、興奮しすぎた。兄貴の気持ち、考えてなかったし。でも、天龍が言ってくれてちょっとわかったよ」

カップをテーブルに置くと、わたしの両肩に手を置いて真っ直ぐ見据える。この子はいつもこうだ。だから、わたしもできるだけ真っ直ぐ彼女の瞳を見てやりたいけど、少し怖くてやや下に落としてしまう。

「俺、兄貴の王子様になりたかったんだ。あの家で暮らしてる兄貴を護ってやるって思い込んでた」

その視線に曇りも嘘もない。わたしにとっても妹は昔から王子様だった。そんなことはわたしの中では自明だったのに、彼

女の中ではまだ足りなかったのだ。

「だけど、やっぱり、兄貴は勝手にお姫様にされちゃ迷惑だったよな」

そんなことはない。必死にふるふると首を振ると、視界が潤んでぼやけてくる。彼女が王子様をしてくれていたから、わたしは自分なりの温かな日々を送っていた。

「そっか。迷惑じゃなかったならよかった」

肩にかけられた手が、優しく首に回される。妹のこんな部分が兄としては不安になってしまいうけれど、身を委ねるのは嫌いじゃない。

むしろ、好ましい。

『あらあら。お姫様にだって、自分で考える頭もあれば、歩く足もあるのよ？』

力が抜けて指が解け、持たされていたカップを落としそうになりかけたところで、

龍田さんのフォローが入る。そうじゃなければ、お互いの服を汚していただく。

「ずっと近くにいたかった」

こんな機会でもなければ、妹は進学や就職であの家を離れてしまう。結婚することだってあるかもしれないし、ただでさえ世話をかけているのだから、自分の幸せを求める彼女の足手まといにはなりたくなかった。

それでも、彼女の傍らに座ってその輝きを眩しさに目を細めながらもいい、ずっと見ていたい気持ちがあったのも本当だった。

瞼から涙が溢れ出し、頬を伝う。わたしは何て卑怯者なんだ。

「わかったよ。兄貴は自分の足でお城を出たんだ。俺と同じ道を歩いてくれるために」

『それなら、オレたちがきっちり護ってやらないとな。天龍様に任しとけ!』

『あらあ、天龍ちゃんは相変わらずムードをわかってないわねえ』

『ぐっ。じゃあ、何て言えばいいんだよ』

『ここは若いふたりに任せて静かにしてる
ところよ』

そう言われると、身を隠せる場所もない
ホールの中で妹に肩を抱かれているのだと
突然自覚し、急に羞恥心が勝ってきた。い

つ春苑はるそのさんが帰ってくるかもわからないし、

ほかに誰かお客さんが来るかもしれない。
顔に熱が集中し、涙どころではなくなる。

「ああ、兄貴はこういうの弱いんだったな。
ただ俺も、どう言えばいいわかんなくっ
て」

妹も少し照れながらわたしから体を離し、
カップを取ってソファの横に座ってきた。

「あとから説明があるかもしれないけど、この計画、というか春苑さんは人命第一みたいだ。だけど絶対に無理はしないでくれ。兄貴は体力少ないから、訓練についても考慮してくれるはずだぜ」

ココアを飲みながら説明してくれたが、健康診断などのデータは春苑さんに渡っている。だから、そこまで無理なことにはならないだろう。

だけどやっぱり想われていることを実感するのは嬉しい。

わたしも涙をぬぐいながら照れ隠しにココアを口へ運ぶ、唇に当たった液体は冷めており、結構時間が経っていたのだと気づかされる。

『あら？』

『ん？』

龍田さんと天龍さんが同時に何かに反応

する。もしかして、敵でも来たのだろうか。
訓練など何も受けてないのに。

『悪い。驚かせちゃったか？ もうひとり
オレたちの仲間が近づいてきてるんでな』

『私たち、そういうのには敏感なのよ』

言われてみると、いつの間にか出ていた
のか春苑さんの車が正面の駐車スペースに
入ってきて、そこから春苑さんともうひと
り、小さな女の子が出てきた。春苑さんは
わたしたちの様子を見て何かを察したのか、
薄い笑みを浮かべる。

「ふたりとも、再会の挨拶はできたってと
ころね。私はさっき駅でここに勤務するも
うひとりの艦娘を拾ってきたところ。正式
な配属順ではひとりめだけだね。ここに施
設を作る時点から私を手伝ってくれた相棒
よ」

そこまで紹介されると、春苑さんの左斜

め後ろに控えていた小柄な中学生くらいに見えるセーラー服の子が前に進み出る。栗色でセミロングの髪をアップにまとめているが、ちよつと雑かもしれない。ノートパソコンを入れるバッグを両手でぎゅつと抱えている。

「国土交通省海事局船舶産業課より出向してきました、いなづま電 なのです」

ぺこりと頭を下げる。国交省？ 出向？何かひっかかる。

「こちらでは春苑先輩の秘書という扱いです。よろしくお願いいたします」

「春苑、先輩？」

妹もきよとんとした顔でその言葉を繰り返す。

「電は実証試験で船魂を降ろして艦娘になった子なの。被験者はプロジェクト内で決めたから、まあ、その、ね。これも副作

用ってやつ。被験者と船魂の同調が最適な
肉体年齢まで戻っちゃうのよ。今は船魂を
受け入れる側の年齢に極力アジャストする
よう手を入れたけど」

珍しく少ししどろもどろになった春苑さ
んが顎に指を当てながら説明する。この人
がこのポーズをするときは、だいたい何か
あるが、やはりそうだった。

「なのです。実年齢は先輩の名誉のため
も二十代。と言っておくのです」

「ご配慮ありがとうございます」

春苑さんの顔から一瞬笑顔が消えたよう
な気がしたが、すぐいつもの読めない笑顔
に戻って電さんをわたしたちのソファへ座
らせると、自分は椅子を取ってきてそこに
腰を下ろした。

「皆さん三人が今日からここで働く艦娘で
す。私としては明るい職場にしたいので、

今から一任期二年の間、協力してくれると嬉しいかなって思います」

曖昧な挨拶で、とりあえずわたしたちはここで働くことが確定した。

『あら、電ちゃんじゃない』

『お久しぶりなのです、龍田さん』

『知り合いか。そのうちオレが知ってる奴も来るのかな』

龍田さんが知っている船だということ、船魂たちも賑やかにしている。彼女たちは彼女たちで、積もる話もあるのだろう。わたしの意識の中から龍田さんの感じがすつと薄れる。彼女たちだけで話せる場所へ行ったのかもしれない。妹もそれは同じよう、ちらりと横目で頷いてきた。

「何度も言うけど、この組織の目的は海岸付近の哨戒および深海棲艦が発見された場合可能な限りの駆除。方針は人命第一です。

なにより艦娘はあくまでも小規模勢力の掃討が目的ですので、相手の規模が大きければしかるべき場所へ話を回す。それも重要な目的だと心得てください。あとは電ちゃん、頼める？」

春苑さんが真面目な話を進めるのは珍しいと思ったが、バッグを開いてノートパソコンを起動させ終わった辺りですぐに電さんにその仕事は押し付けられた。これが秘書の仕事なんだろうか。

「なのです。そもそも呪術兵器は二〇〇〇年の六月、アメリカ、カナダの五大湖に突然現われた深海棲艦の棲地を破壊するため使用された、ラヴクラフト仮説を参考にした佐野・嶋田理論による呪術ミサイルが最初なのです」

妹はあくびをかみ殺した顔でその説明を聞いていたが、アメリカのミスカトニツク

大学教授、ラヴクラフト博士が提唱していた心の問題に対する仮説で、時空には物理層と思惟層しゐがあり、物理層に存在する人間の肉体と重ねあわされるように記憶や意識などが思惟層に存在し、ひとつの人間が存在するという説らしい。幽霊などは思惟層に意識だけが残された人が思惟層を認識できる人に認識されて起こり、お払いなどの呪術は人類が経験的に獲得してきた思惟層を操作するための技術だった。というが、わたしにもちんぷんかんぷんだ。

そして、このラヴクラフト仮説から深海棲艦が人間でいう肉体を思惟層に置く生物だと考え、思惟層への干渉方法やその影響の指針として提示されたものが、京都大学形而上生物学研究室の研究者、佐野教授と嶋田助教授による佐野・嶋田理論。

そして、それは実際に効果を出した。

アメリカ政府が世界中の宗教団体と交渉して手に入れた聖なるものを込めたミサイルは、佐野・嶋田理論の確からしさを証明するかのようには深海棲艦の棲地を殲滅した。これが、二〇〇〇年にニュースやネットで大騒ぎされていた五大湖会戦の真相だったそうさ。

「じゃあ全部ミサイルではあつとやっちなえばいいじゃねえか」

妹が眠そうに言うと、電さんは首を振った。

「そもいかないのです。思惟層を揺さぶるといふことは、近くにいる人間や動物にも影響があるということなのです。生態系への影響などはまだ未知数なので、野放図に使うわけにもいかないのです」

事実核兵器などはそうだったのだし、慎重になるのは理解できる。

「それに何たって、聖遺物や仏舎利なんか、それ自体人類の歴史遺産だしね」

春苑さんも口を挟む。この人はどうも見ている場所がずれている感じがするけれど、そのずれ方が安心させてくれる。そんな人に感じられる。

「こちらの資料も見るので。深海棲艦の主な棲地と出現地域のポイントを時系列順にポイントしたもののなのです」

「アールライから広がっているというより、突然出てきてそこから一気に広がってるよ
うな感じがします」

「なんか冴えてるな、兄貴」

見たまま言っただけなのだけど、妹に褒められるとちょっと誇らしい。

「そうなのです。つまり、深海棲艦とはアールライを故郷にして移動を繰り返すタイプの生体ではなく、むしろキノコなど菌

類に似たものだと考えられるのです」

「栄養があるとそこから生えてくる。って感じなのかな？」

妹もなんとなくわかったようで、話に参加してくる。

「ポナペ沖地震をきっかけにして、地球全体に菌糸が絡み付いちゃってる状態。つてのが今の主流な仮説なのよね。で、数が揃ったら環境を繁栄に最適化して爆発的に殖えだすの」

春苑さんが自動販売機から取ってきた紅茶を飲みながらそれを受ける。

「だから、増殖が始まる前に発見して未然にちよっきんすれば被害は最小限で食い止められるし、そのためには柔軟に動ける人員や兵器が必要ってわけで、わが国では艦娘を開発したし、他国でもいろいろやってるわ」

「それと並行して大規模な棲地には呪術ミサイルや呪術弾道弾による反攻が想定されているのですが、やはり初動が大事なのです。とくにこの街は漁港もあるし、沖合いには船舶の航路も多いので、国交省としてはこういう場所をまず警備する方針になったのです」

電さんが話をまとめたところで、おおまかな説明は終わった。

「で、そのために設置されたのが各省庁の外郭団体たる鎮守府なんだけど、この呼び方だけは本当センスなくて困るわ」

鎮守府の話題になると春苑さんの言いは辛辣になる。何かあるのだろうか。

「それに、この建物も緊急で準備したものだから改装のために業者さん入れるからしばらく不自由するし、実は私たちの宿舎だってまだなわけ。ごめんなさいね」

「じゃあ俺が今まで駅前のホテル住まいだったのも？」

ちょっと早く出てきていた妹はずっとホテル住まいだったらしい。そういえば、駅前にはビジネスホテルが何軒があった。

「そういうこと。とにかく形を整えろって上がうるさくて。不自由あったらごめんなさい」

「いや、高校の寮とそう変わんないからそこはいいんだけどさ」

「問題はこれからの宿舎よねえ。順当に考えればアパートやマンション借り上げるんだけど、お姫様は一人暮らし、大丈夫？」

春苑さんからその呼び名で呼ばれ、あれをどこかで立ち聞きされていたのかもしれないと考え、かっと顔が赤くなる。

「あら、悪かったかしら？　ともかく、それとは別にもうひとつプランがあるんだけど

ど」

笑顔の度合いが一段深くなる。この人の笑顔は、綺麗なのだけど何か怖さもある。

「この辺は広い一軒家が結構余ってて、賃料も安い。物件としてもこの建物に近いものが多いし、これに全員で住むっていうのも悪くないんじゃない？」

バッグの中から何枚かコピー用紙を取り出してくる。もう目ぼしい物件をいくつか選んでいるらしいということは、春苑さんとしてはこちらが本命のプランらしい。

「先輩、家庭に飢えてるからってそれを職員に押し付けるのはアンフェアだと思うのです」

電さんがちくりと釘を刺すが、春苑さんは笑いの仮面でそれを受け流す。このふたりの関係はなんだか妙に気になる。

「俺はいいと思うけどな。確かに兄貴って

ひとりにしてると危ういんだよ」

「龍田さんは天龍さんとアパートで同居に
してもいいと思うのです」

「密室でこの兄妹をふたりっきりにするの
も、私としては危ういと思うのよ」

春苑さんはどんどん爆弾を投げつけてく
るが、大爆発したのはわたしにだけで妹に
はさしたる打撃を与えてないらしい。現に、
顔を真っ赤にしてるのはわたしだけで、妹
は何か察した顔はしたが平然としたものだ。
「王子様がお姫様に悪いことをするとも
思ってるのかい？」

「この場合、お姫様が王子様に悪いことを
する可能性も考慮に入れないといけないっ
てこと。それに、ふたりがラブラブすぎて
も新人ちゃんが入ったりすると困るじゃな
い」

春苑さんの指摘に、妹はその可能性には

初めて気づいたと言わんばかりにぼかんとした顔をしていたが、そこに電さんが咳払いをしつつ言葉をかぶせてきた。

「今日の勤務時間はそろそろ終わりなので。業者さんが入るまで何日かあるし、詳しいことは明日も引き続き話せばいいのです」

その言葉を待ってましたと言わんが如く春苑さんは勢いよく椅子から立ち上がって、大きな音を立てて椅子を転がした。

「そうね。今日のところはこれくらいにしましょう。帰りは当面の人員が全員揃ったお祝いで焼肉でもどう？」

「いいねえ。兄貴も少しは食えるようになったか？」

春苑さんに言われたのも何のその、妹はわたしの肩に手を廻してくる。

「当然先輩のおごりでなら行くのです」

ノートパソコンをバッグにしまってそう
言いながら、電さんはわたしのバッグを見
やる。

「ところで、龍田さんですが、お着替えな
どは持ってきてますか？」

そこではたと気づく。そんなことはすつ
かり忘れていた。わたしの過去は何もかも、
妹のことに関する物事以外は全部あの離れ
に置いてきてしまった。

もちろん、生活用具も。

『よっしゃあ！ それならこれから早速揃
えなきゃな』

『あら天龍ちゃん、随分嬉しそうね』

『たりめえだろ、龍田の相棒なんだ。ぐつ
と可愛いの見立ててやるぜ』

「いいなそれ、兄貴を俺たちのお姫様にし
てやる」

妹に肩を組まれて半ば強引に、ホールを

後にする。

「若い子って自分の欲望に素直でいいわあ。
焼肉の前にまず駅前のデパートかしら」

「先輩、迎えにいったときは何をしていた
のです？」

「あら、私はきちんと確認したわ」

春苑さんと電さんの会話が後ろから聞こ
えてくるが、わたしは妹にこうして引っ張
られていくのが嫌いではない。ここではな
いどこかへ連れて行ってくれる。そんな信
頼があるのだ。

車で十分程度走れば市街地へ出られるの
で、駅前のデパートへ入る。和服を着た春
苑さんに高校の制服を着た妹、セーラー服
の電さん、そして女装の私。周りからは変
な一団に見えるだろうし、実際自分が見て
もちよっと気になりそうだ。

「俺にはこういうの似合わないからさ、実

は兄貴にどんどん着せたかったんだ」

妹はそう言いながらどんどんふんわりとした印象のワンピースやフリルがたっぷりブラウスを薦めてきて、春苑さんもそれをにこにこ笑いながら見ている。電さんはいえ、わたしたちの集団からちょっと距離を取りつつも、着まわしや予算についてはしっかりと口を挟んできた。

みんなの着せ替え人形になりながら、とりあえず二、三日のローテーションで着ていけるくらいの服を買ったら、次は下着売り場へと連れて行かれる。

「そーいや、兄貴はブラするのか？」

『うーん、キャミだけでいいんじゃないかねえの？』

『心までお姫様になってもらうなら、まずは形からよ？』

「そこまでするのは、ちょっと」

龍田さんがかなり怖いことを言った気がしたのでさすがに口を出させてもらい、結局はキャミソールだけで勘弁してもらおうこととなった。

『あら。もう五十年以上経つから当然だけど、随分発展してるのね』

『これはちょっと破廉恥だぜ』

いつの間にか船魂のみんなまで盛り上がり、下着を見ながらああだこうだと言いはじめた。龍田さんは明らかに際どいのを王子様を落とすときのためと言って薦めてくるし、春苑さんもそれを見て密かに親指を立てている。

しかし、そんな騒ぎも電さんの一言で集束することになった。

「しばらくはホテル暮らしでコインランドリーなので、シンプルなものにしておくのです。そういうのは自宅で洗えるように

なっってからなのです」

何だかんだで、一番年下に見える電さんはしっかりとみんなをまとめてくれる。春苑さんがかなり奔放な分、確かにいいコンビだと感じた。

残りはお風呂用品と歯磨きくらいで、そういうのはホテルの近くにあるコンビニで買うことにして、みんなで焼肉を食べに向かった。

焼肉は妹と以外にも電さんがトップ争いをして、春苑さんはそこそのところで切り上げていた。美容のためらしい。

私は肉を少し食べ、あとはサラダとスープで時間を繋ぎながら三人の様子を眺めていた。

相変わらず、だけどどんどん強くなっていく妹。

つかみどころはないけど、悪い人ではな

さそうな春苑さん。

真面目でしっかりものの電さん。

これから何が起こり何をやるのかは説明を聞いてもピンとこないし、彼らの間に私が入っていけるかちよつと不安だけど、何とかやっていけそうな気はする。

だから、今日はたぶんいい日だし、これからもいい日にしたい。

なんだか私も随分前向きになった気がする。

そんなことを、行き交う車のライトで照らされる窓を見ながら考えた。

「それじゃあ、明日は八時にここ集合して私の車であっちに移動ね」

焼肉を終えてホテルへ入ると、各部屋の鍵を渡しながら連絡事項が伝えられ、解散になった。

部屋へ入って荷物を置き、シャワーを浴

びる。着替えはさつき揃えた下着類を違和感を覚えながらも何とか着け終わり、ホテルのガウンを着て終わらせる。

そうした日常の雑事を一通り済ませると、突然ひとりになった実感が押し寄せてきて、それは不安へと変化していく。

どうしようもなくベッドの上で毛布を被っていると、ドアをノックする音。

「俺だよ。ちょっといいか？」

お姫様の困ったときに、王子様はいつももやってくる。

そんな言葉が頭に浮かぶくらい、ぴったりのタイミングだった。いそいそと扉を開けると、わたし同様既にお風呂を済ませたのかタオルで洗い髪をまとめた妹がいた。

ふたりベッドに並んで腰掛ける。手と手がぎりぎり触れ合わない距離。

「うまく言えないけどさ。俺もやっぱ兄

貴と一緒にいれるの、嬉しいぜ」

かなりの沈黙を挟み、言葉が始まった。

「ひとりだと危なっかしいってのももちろんあるけど、さ」

照れくさそうにお風呂で上気した顔をさらに色づかせ、彼女は続ける。

「やっぱり一緒にいると、いいんだよ」

す、と掌を差し出して絡めてくる。わたしが体温を吸い尽くさないか心配なくらい温かい。

「小さい頃さ、森とか川へ無理に連れ出したのもさ。兄貴と一緒にいると気分がいいから」

わたしが誰かを心地よくしていたなんて考えていたこともなかったのに驚き、妹の顔をまじまじと眺めると、きょとんとした顔でこちらを見返してきた。

「おかしいこと言ったか？ 兄貴はいつも

俺のことを見てくれてた、俺のやることを喜んでくれた。って言えば言うほど嘘みたいになっちまう！」

もどかしそうに頭に巻いていたタオルを放り投げると、乱れ髪がばさりと露になる。

「わかってる。と思いたい」

息の乱れた彼女の掌を握り返す。

「わたしも、一緒にいるのが心地よかった。みんなの輪の中に入れなくても、見ているだけで楽しかった」

「何だ」

と乱れた髪の奥に瞳を隠して妹はくつくつ笑いながら、思いつきり吐き出した。

「結局、好きってことじゃないか」

そして、仰向けのままベッドへ大の字に寝転がり、流し目でこちらを見る。彼女のこんな目は初めてだ。鼓動が激しくなる。

「随分、遠回りしちゃったな」

繋いだままの掌をもっと強く握る。わたしには、これくらいしかできないから。

「わたしも、好きだよ」

小さな部屋に閉じこもる世間知らずのわたしに、世界を見せてくれた王子様。嫌いなわけがないじゃないか。

そんなことを考えているとぐい、と手を引かれ、私もベッドへ倒れこませ、妹がその上に覆い被さる。

顔が近い。

鼻と鼻がぶつかるくらいの近さ。

それがぐっと縮まると、わたしの唇に柔らかいものが触れた。

ついでに、二度、三度。

「誓いのキスだぜ。王子様はお姫様を必ず幸せにする」

私の背中に手を回して起き上がらせながら、照れくさそうに妹は宣言した。

妹が横にいるだけで幸せだったのだから、わたしはわたしの幸せなんて、考えたこともなかった。

それなら、今までずっとわたしは夢の国のお姫様だった。

怖いのは、王子様がどこか遠くへ行ってしまうこと。他に目指すものや憧れるもの、愛するものができてしまうこと。

それがどこまで造っても偽りのお姫様にしかたりえないわたしの夢の国に訪れる終わりのときだ。

そんなことを考える自分が少し嫌になりながらも、頷くことで妹の誓いに答えた。

わたしは必ず、幸せになってみせるし、今は幸せだ。

少なくとも、今から二年だけは、絶対に。

〈了〉